

休息に行った先で、手痛く学んできた： 「連立 (Interdependence)」の道の上での気づき

キムイッカン
金翼漢

明知大学記大学院名誉教授

I. 安山の教室：悲しみを乗り越え、「連立」の主体として立つ

2014年4月、時間は止まり、国家は見えなかった。セウォル号沈没事故は、記録学者としての私の人生を根底から揺るがした事件だった。現場へと向かう体をどうすることもできなかった。それは、ある種の学者的使命感以前に、一人の人間としての道理であり、本能に近い動きだった。珍島・^{チンド}彭木港の冷たい潮風の中で、散逸していく記録を掴むことよりも差し迫っていたのは、遺族のそばにいたことだった。共に泣き、共に怒り、共に夜を明かしながら、私は記録の対象としてではなく、記録の主体として彼らとの共同作業を始めた。

その年の8月、私たちは安山に「416記憶貯蔵所」という名の小さな種をまいた。1999年に明知大学記録学科の教授として赴任して以来、私に関わった中で最も熱く、痛みを伴う現場のアーカイブであった。しかし、すぐに「誰がこの記憶の主となるべきか」という実践的な問いに直面した。従来の方法であれば、当然専門家が前面に立ってアーカイブを設計し、運営すべきであった。しかし、私にはそうすることができなかった。国家によって最も大切な存在を失い、真実さえも背を向けられた人びとから、記憶の主導権まで奪うことは、また別の暴力だと考えたからだ。私は初めて、専門家ではなく、災難の当事者たちが記録の生産と解釈、そして運営の主体となるアーカイブの可能性に全てを賭けてみることにした。

そうした中、2016年の秋頃、遺族の方々と一緒に「ノートパソコン教室」を開いた。悲しみに沈んでいた母親たちが、おそろおそろキーボードの上に手を置いた。タイピングの練習からワードプロセッサの活用まで、週に一度の授業は、時には笑いが、時には涙が共にある癒やしの時間であり、記憶をめぐる闘争の訓練場であった。皆スマートフォンでのやり取りに慣れていたので、私の目を盗んでこっそりスマートフォンで連絡を取り合っては見つかるのが常だった。「お母さん！ノートパソコンで連絡してくださいって言ってるじゃないですか！」。私が声を荒げると、教室にいる誰もが「ハハ」と子どものように笑い出した。その笑い声は教室を満たし、私たちの凍てついた心を少しずつ溶かしてくれた。

最終目標は、各自が犠牲となった我が子の資料集を自らの手で作り上げることだった。家

に残された子どもの日記帳、賞状、絵、写真などを自ら分類し、意味を付与しながら一冊の本に編み上げていく作業。それは単なる記録行為を超え、喪失の苦痛を記憶の再構成へと昇華させる「積極的哀悼 (active mourning)」の過程であった。9人の方が始め、4人の方が100ページを超える資料集を完成させた。その過程は私に深い響きを与えた。他人の支援に頼る「依存 (dependence)」でも、すべてを独りで解決しなければならない「自立 (independence)」でもない、互いの肩にもたれかかり、共に立つ「連立 (Interdependence)」の可能性を目撃したのだ。まさにその4人のお母さんたちが、のちに416記憶貯蔵所の所長、事務局長、ドーセント (展示解説員) チーム長、そしてアーキビストとなり、記憶の家を固く守る礎となった。彼女たちは私に、理論書数十冊よりも鮮明に「連立」の力を教えてくれた。

セウォル号事故の後も、私の人生は止まらなかった。安山の遺族たちとの連帯活動を続けると同時に、大学での講義と後進の育成、そして国家記録管理体系を立て直すための様々な実践的活動が休むことなく続いた。体は疲弊していったが、心の中の情熱は消えなかった。そんなある日、ふと、日常の空間を変えて一息つく時間が必要だという思いがよぎった。これ以上疲れ果てることなくこの道を進むために、しばし違う風景の中で自分を振り返り、再充電する時間が必要だった。私は大学に安息年^{サバティカル}を申請し、日本の熊本学園大学へと向かった。

Ⅱ. ^{みなまた}水俣の閑静な日々：遊びと偶然の中で体化した「連立」の感覚

熊本での生活は、期待以上に穏やかで温かいものだった。熊本学園大学水俣学研究センターの同僚教授や研究員たちはもちろん、大学の総務課の職員たちまで、誰もが私を温かく迎えてくれた。彼らは、燃え尽きる寸前まで私を追い詰めた韓国での人生の重みを理解してくれ、窓の外に緑が広がる素敵な研究室まで提供してくれ、私の「休息」を心から応援してくれた。私は彼らの配慮に後押しされ、思い切って「遊ぶ」ことにした。留学時代に身につけた日本語は、長く使っていなかったせいで拙く、深い対話をするには多くの困難があった。むしろ、その拙さのおかげで、不要な付き合いに縛られることなく、ひたすら自分だけの時間を持つことができた。

私はほとんどの時間を、研究よりは家で休んだり、九州の美しいオルレ (トレッキング) コースを歩き回ったり、九州各地を旅行したりして過ごした。その日その日の断想や風景を記録する日記執筆に没頭する、まさに閑静な日々であった。ところが逆説的にも、意図的に空っぽにしたその「遊び」と「休息」の時間の中で、私は「連立」という概念のまた別の次元を、全身で体得していた。水俣という空間が抱える記憶と、人びととの偶然の出会いが、知らず知らずのうちに私の中に静かに染み込んでいたのだ。

その決定的な出会いは、ほとんどが奇妙な偶然のように訪れた。ある日、私を研究員とし

て招聘してくれた原田正純教授が、発表会に出席してほしいと要請してきた。実は私はその前日、非常に特別な経験をしたばかりで、なぜかその要請を断りづらかった。九州オルレの八女コースを歩くために駐車しておいた私のレンタルした車を、誰かが不審に思い通報し、私が車の前に貼っておいた大学の代表番号に連絡がいき、総務課の職員たちの機転でかろうじて私に連絡がついたのだ。結局、警察が私のいる場所までやって来て、パトカーで私の車がある場所まで一緒に行き、私が車の持ち主であることを確認するという、映画のような「エスコート」を受けることになった。この愉快的騒動で大学に申し訳ない気持ちになり、私は素直に発表会場へ向かった。何らかの義務感や責任感のためではなかった。ただ、いくつかの偶然が重なって生み出された奇妙な引力、その力に身を任せただけだった。

その日の発表者は大阪で活動する精神科医であったが、彼の話は私にまた別の次元の気づきを与えてくれた。彼の名前を正確には覚えていないが、彼が伝えたメッセージは鮮明だった。彼は患者を病院という施設に閉じ込める代わりに、直接患者の家を訪ねていた。彼の診療は薬を処方するだけでなく、患者と一緒に買い物をし、ご飯を作り、掃除をする行為までを包括していた。精神疾患を患う人びとのための、地域社会に根差した包括的なケアシステムに関する話であったようだ。それは、人間の尊厳が、孤立した施設ではなく、関係性や日常の暮らしの中で回復するという信念の実践であった。私は彼から、社会的な大災害の被害者たちの連立を超え、ケアと癒やしの領域へと拡張される「連立」のまた別の顔を見た。

2017年のある日、研究センターの仲間たちと同行した現地調査で、私は水俣病被害の象徴的人物である坂本しのぶさんのご自宅を訪問し、お会いする機会を得た。胎児性水俣病患者である彼女は、生涯を苦痛の中で生きてきたが、自身の体そのものを水銀中毒の惨状を告発する「記録」として、世界中を巡っていた。彼女との対話は、私に「運動」と「生活」の違いを気づかせてくれた。セウォル号の遺族たちの連帯が、国家権力の暴力と忘却に立ち向かう熾烈な「運動的」性格を帯びるのに対し、坂本さんや水俣の共同体の闘争は、数十年の歳月をかけて苦痛と差別を耐え忍び、記憶を日常へと体化させてきた「生活的」深みを持っていた。彼らの連立は、巨大なスローガンではなく、互いの安否を問い、傷をいたわり合う日々の暮らしの中に溶け込んでいた。その出会いは、精神科医の話から始まった私の気づきを、より深く、強固なものにしてくれた。

その時に体化した「連立」の感覚は、知らず知らずのうちに私の中に深く根を下ろし、5年以上が経ってから、その力を実感することになった。2023年、私が運営する「アイキャン大学」の大邱でのイベントに、障害を持つ詩人のイ・フンヨルさんが訪ねてきてくれた時が、まさにそうであった。脳性麻痺で体と言葉が不自由な彼は、足の指で詩を書き、オルガンを弾いて世界と疎通していた。彼に会った時、私はあまりにも自然に、彼の障害者文学運動とアイキャン大学の大衆教育活動をどう連携させられるか、その構想を思い描くことができた。

そこには、いかなる意識的な努力も必要なかった。水俣での経験が、私の体にその概念をすでに深く刻み込んでいたからだ。ただ遊んでいただけのように思えたが、水俣での気づきは、このように現在の私の人生を支える深い内的能力として作用していたのである。

Ⅲ. 実践へと続く気づき：オーラルヒストリー、教育、そして再会した人びと

熊本学園大学東アジア学科の申明直教授^{シンミョンジク}が、自身が運営するフェアトレード・カフェにぜひ来てほしいと誘ってくれたある日の午後であった。彼の温かい招待に応じ、お茶を飲みながら話をしていると、ちょうどその上の階に水俣学研究センターの事務室があるという話を聞き、何気なくついて上がった。そこで私は、数多くの記録物や資料が息づく現場を目の当たりにした。研究員たちと記録の分類や整理について少し話したが、私の気づきは別のところにあった。それは「オーラルヒストリー（口述記録）」の可能性であった。オーラルヒストリーは、単に過去の出来事を書き留めることを超え、苦痛を抱える人びとの声に歴史の中心の座を与える行為である。私は水俣での経験を通じ、オーラルヒストリー・アーカイブが、散らばった個人の記憶をつなぎ、共同の歴史を再構成し、癒やしのナラティブを創り出す最も強力な「連立」の道具となり得るという期待を抱くようになった。

その期待は、帰国後すぐに「セウォル号沈没事故 生存生徒および兄弟姉妹オーラルヒストリー・アーカイブ」プロジェクトを開始するという実践へとつながった。この作業は一人でできることではなかった。ソウル大学人類学科のイ・ヒョンジョン教授をはじめ、歴史学、人類学、女性学など、様々な分野の研究者10人余りが快く協力してくれた。私たちは2年余りにわたり、一人ひとりと数回にわたって会い、最低でも6時間以上の、深みのあるライフストーリーを聞き取った。事故の瞬間だけでなく、彼らの人生全体の物語を尊重し、耳を傾けた。その長く困難な過程を経て、一人の声をそのまま一冊の本にまとめるという原則のもと、2019年と2020年にかけて、合計100冊余りの口述集が世に出た。

その過程で、私自身も深い傷を負った。プロジェクトが終わった後、私とイ・ヒョンジョン教授は、それぞれ9ヶ月と15ヶ月間、精神科の治療を受けなければならなかった。他人の苦痛を全身で受け止める行為がもたらす「代理受傷 (vicarious trauma)」であった。しかし私は、その経験を通じて、ようやく彼らのそばにもう少し近づくことができたと感じている。私たちの社会は、特定の人びとを患者や罪人として烙印を押し、隔離するが、実のところ、私たち誰もがいつでもその境界を越えうる脆い存在ではないだろうか。その気づきは、私を新たな道へと導いた。私たち自らが、患者や罪人ではなく、尊厳ある主体として共に生きていく道を、より多くの人びとと模索しなければならないという思い。それがまさに、大衆教育の始まりであった。

私はYouTubeチャンネルを開設し¹⁾、オンラインのオルタナティブ・スクールである「アイキャン大学」を設立した。セウォル号の遺族たちにノートパソコンを教えたあの気持ちで、より多くの市民に、人生を省察する道具を贈りたいと思った。「読書と文章術」を通じて考える力を養い、「人生の省察」を通じて自身を深く理解し、「歓待の関係」を通じて他者と温かくつながり、「享受する勇気と能力」を培って自らの人生を丸ごと楽しむ方法を共に学んでいる。こうした学びを通じて、市民一人ひとりが人生の主体として立ち、さらには5人前後の小グループを通じて互いの人生を分かち合い、支え合う学習共同体、すなわち新しい形の「連立」を創り出している。

IV. 再び、安山と水俣が会う

そんなある日、嬉しい連絡が来た。水俣学研究センターの「家族」たちが韓国を2023年4月に訪問するという知らせだった。彼らと共に安山の416記憶貯蔵所と416民主市民教育院を案内しながら、私の長年の同志たちに私たちの成果を見せられるという事実、胸がいっぱいになった。通訳がいたので、私は具体的な説明は現場の責任者たちに任せ、ただぼつんと彼らについて回るだけだったが、心の中はいつにも増して熱かった。

特に416民主市民教育院の一つの事務室で繰り広げられる風景を目の当たりにした時、私は深い自負心を感じた。京畿道キョンギド教育庁所属の公務員たちと、416記憶貯蔵所の民間活動家たちが、仕切りもなく一緒に働いている姿。それこそが、私たちが長い間夢見て、遺族たちと数え切れないほどの会議と討論を重ねて共に作り上げた「官民協治 (Public-Private Partnership)」モデルであったからだ。公共の安定したシステムと、民間の現場性が美しく結びついた、持続可能な「連立」の姿がそこにあった。416民主市民教育院長と416記憶貯蔵所長が誇らしげにこのモデルを説明する時、私は時空を超え、安山と水俣の苦痛、そしてそれを乗り越えようとする人間の偉大な努力が、私たちの努力の中で一つの素晴らしい結実としてつながっていることを確認できた。

数年前には、水俣から講演の依頼を受けたこともあった（2023年10月、第20期公開講座）。このように、途切れ途切れに続く出会いではあるが、そのつながりの糸は不思議なほど強靱に感じられる。もちろん、その講演は冷や汗をかく経験であった。日本語に自信がなく、原稿を几帳面に書いていったのだが、いざ演壇に立つと、照明のせい（そう言い訳してみる、ハハ）苦勞して準備した原稿がよく見えない。結局、原稿を辿々しく読みながら、物足りなさを感じて即興で説明を付け加え始めたのだが、説明はしたいのに日本語はもつれ、冷や汗ばかりかいた。結局、時間超過で準備した内容の半分も伝えられずに終わるという、心残りの講演となってしまった。

私は申し訳なく、少し恥ずかしくもあったが、その未熟さと当惑の中で、決まってまた一つの課題を発見した。私がしている大衆教育だけでは不十分だという思いだった。個人の人生の改善が、社会的な苦痛の現実と懸け離れていて、何の意味があるだろうか。だから、「アイキャン大学」などで熱心に自らの人生を省察し、成長させていく市民たちと、水俣やセウォルのような記憶の現場をつなぐ、新しい連携が必要だという結論に至った。それは、既存の教育プログラムのように重くなくてもよかった。講演やワークショップのような、少し「緩やかな繋がり」を通じて、市民たちが社会的な苦痛の意味を自ら内面化できるよう手助けをすること。そして、この試みもまた、「官民協力」という形で公的機関と共に解きほぐしていく時、より大きな力を持つだろうという確信が芽生えた。

振り返ってみれば、ただ休息に行ったはずの水俣での時間は、私の人生の重要な転換点となった。そこでの出会いは、絶えず私に重い気づきと新たな実践課題を与えてくれる。私を実践へと駆り立てる水俣との出会い。そのせいで私の日常はますます忙しくなるばかりなので、ある意味、不吉な縁なのかもしれない。しかし、今この文を書いている瞬間、その全ての過程が全く負担には感じられない。むしろ、苦痛の中でも意味を見出し、実践の中で喜びを発見する「享受の実践 (enjoyable practice)」が私の身についたからだろうか。私は今も、そしてこれからも長く、水俣に大きな借りがあるまま生きていこう。その借りを喜んで返していく道のりこそが、私の残りの人生を彩る、素敵の一つの物語になると信じている。

注

- 1) Youtubeチャンネルは、「キム教授の3つのこと」[youtube.com/@ican](https://www.youtube.com/@ican)や「アイキャン大学」ican.co.krで視聴できる。